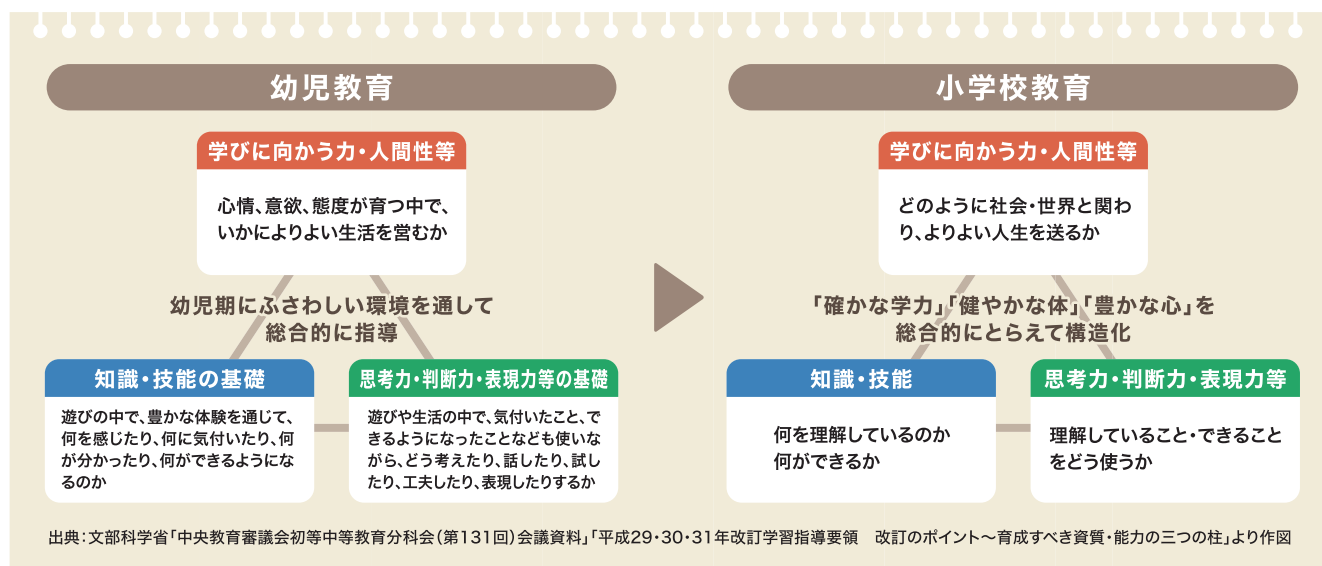


4

架け橋期の教育 ～小学校への接続として意識したいこと～

幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、すべての子どもに等しく機会を与えて育成していくことが必要です。また、幼児期は遊びを通して小学校以降の学習の基盤となる芽生えを培う時期であり、小学校においてはその芽生えをさらに伸ばしていくことが必要です。子どもの成長を切れ目なく支える観点からは、幼児教育と小学校教育を円滑に接続することが重要となります。5歳児から小学校1年生の2年間で「架け橋期」と位置付け焦点を当てるとともに、決して小学校教育の前倒しではなく、乳児や幼児それぞれの特性など発達の段階を踏まえ、一人ひとりの多様性や0歳から18歳までの学びの連続性に配慮しつつ、「架け橋期」の教育の充実を図り、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくることが重要です。

「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」では、「育みたい資質・能力」(3つの柱)をあげ、小学校以降の教育へつないでいます。また、その具体的な姿として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)が示されています。



小学校教育へ円滑な接続を図るためには、「育みたい資質・能力」(3つの柱)の重要性を認識し、日々の保育の実践の中で一体的に育み、就学前保育・教育施設で子どもたちが充実した生活を送れるようにすることが必要です。

乳幼児期に、一人ひとりが「温かいまなざし」に見守られながら、安心できる環境の下で、乳幼児期にふさわしい体験をすることが育ちを支え、生涯の学びへとつながっていきます。

従来から小学校入学にあたっては、それぞれの就学前保育・教育施設、小学校においてさまざまな工夫が行われてきました。今後さらに幼児教育の「遊びの中にある学びの芽生え」を小学校教育の「自覚的な学び」へと円滑につなげていくためには、これまでの連携・交流で培われた経験を生かしつつ、子どもに関わる大人が立場の違いを越え、幼児教育と小学校教育の具体的な内容や、子どもたちへの関わりの工夫などを共有し、子どもの姿を中心にどのように接続していくことが望ましいかを試行錯誤しながら協働し、円滑な接続をめざしていく必要があります。

また、本市として就学前保育・教育施設と小学校の職員が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)を手がかりに、子どもの育ちを共有し、それぞれの保育や教育を充実させることができるよう、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)や架け橋期における接続の意義などについて理解を深める研修などを引き続き実施していきます。